

地下鉄開業と二組の外人

札幌で地下鉄が開通したのはオリンピック開催のひと月半ほど前、昭和四十六年十二月のことだった。イギリスから若い新聞記者が一人、オリンピック準備に大童(おおわらわ)の札幌を取材にやって来て、私が案内することになった。出来たばかりの地下街をまず案内し、次いで、ゴムタイヤで走り、動力も軌条を挟んで別のゴムタイヤが伝えるという、騒音のない画期的な方策を「札幌方式の世界に冠たるシステムだ」と紹介した。

彼もレールや車輛をのぞき込みながら「ふむふむ」と感心の様子だった。

ところが私が「これが世界で最も新らしい地下鉄だ」と云ったとたん、彼は顔を上げて昂然とこう言った。

「わがイギリス・ロンドンには、世界で最も古い地下鉄がある」と。

なるほどイギリス人のプライドとは、こういうものか、と思い知らされた感じがした。ロンドンで初めて地下鉄が走ったのは日本では江戸時代だ。チューブというあだ名のこの地下鉄、うすよごれて騒音を撒き散らしながらも、今もなお健在。しかも地下鉄は網の目のように市中の地下をめぐっている。

考えてみれば、ロンドンに地下鉄が走り始めた頃、札幌はまだ原野のまま、街づくりさえ始まっていなかった。ロンドンと札幌の違いというか、文化の差というか。「ロンドンには世界で最も古い地下鉄がある」という先駆性こそが大切なものかもしれない。

処で札幌の地下鉄改札は性善説で成り立っている。普段は開いているが間違った通り方をすると閉じる仕掛だ。一方、普段は閉じていて、正しい切符だと開く方式は性悪説に依拠していると私は勝手に思っている。

人がすき間なく列をつくって、何人が地下鉄改札を通り抜けられるか、勝手に実験して遊んでみせてくれたのは、姉妹都市ポートランドからの一行だった。中島公園駅から乗車する際、誰が云い出したのか、背と腹をくっつけるように、ひしめきながら一列で、一枚のチケットで改札を抜けようとした。案内していた私も、駅員も呆然としている中、彼等は笑いながら試していた。六人目になって、やっと扉が始動した。「分った」と彼等は笑い、ちゃんとチケットを買って構内に入った。こんな実験(?)初めてだと駅員がにが笑いをしていた。米英人のお国柄の違いだろうか。